

体型が小形化している傾向がみられることは注目に値する。オオオニバスやオオサンショウモのような例外もあるが、ミジンコウキクサをはじめ、アカウキクサ、ナンゴクデンジソウ、ミカワタヌキモ、ヒメシロアサザ、コモウセンゴケ、リュウキュウカンガレイ、ヒメミクリなどがあげられる。この分化の原因（遺伝子）は光条件や温度条件が著しく影響するものと考えたいであろう。読者のご批判をいただければ幸いである。

最後になったが、このたびの調査に際し次の諸先生・

各位にいろいろと協力ご指導いただいた。この紙面を借り、厚く御礼申しあげる。（順不同）

池原貞男（元琉球大学学長）・坂口法明（琉大院生）、幸丸政明・中島 和・桑原靖則（環境庁自然保護局技官）、島袋 曠・佐久本 徹（沖縄県立教育センター）および会員の池原直樹、和泉克雄、沖 陽子、加崎英男、角野康郎、立花吉茂、田中 修、戸田英雄、中井三従美、野口達也、浜島繁隆、別府敏夫、和気俊郎、山城亀延（元知念高校長）。

ヒメコウホネ愛知県 知多半島に3番目の自生地

磯部 亮一

知多半島は、瀬戸内海地方と同じように、ため池の多い地域であった。愛知用水の通水後は、不用となった池の埋め立てが続いている。

ヒメコウホネ *Nuphar subintegerrimum* Makino の自生地も以前には、各地にあったと考えられるが、現在では、その自生地はきわめて少ないのが現状である。これまで半島内5市5町で、自生地の確認がなされているのは、武豊町および常滑市の2ヶ所である。

筆者は、昨夏（1988年）阿久比中学校の加川満氏の案内で、半島中北部に位置する東浦町内の東仙坊池において、池の北端のヨシ群落内で抽水性の状態と、浮葉性の2形態を観察した。とりあえず知多半島で3ヶ所目の自生地として、ここに報告して標本の採集もしておくことにする。

愛知県常滑市蒲池海岸に漂着した 淡水性の水草8種

中井三従美

蒲池海岸は愛知県常滑市の北部にある。この海岸は昭和34年の伊勢湾台風で堤防が決壊し、その後、改築された半自然海岸である。防潮堤の外側は幅50mほどの砂浜が広がり、コウボウムギ、ハマボウフウ、スナビキソウなどの好砂性海浜植物の宝庫である。この海岸に打上げられる貝殻や海草（sea grass）に混って時折り南の国の贈物であるニッパヤシもみられる。しかし、近年は空缶、ポリ容器、発泡スチロールなどのゴミ類も多く、時

には傷ついた海ガメや鳥の死骸が打上げられて折角の浜の景観をそこねている。

平成元年6月20日、汀線近くに直径1mほどのヨシの株が打上げられていた。2、3日前に愛知、岐阜両県に大雨が降ったため、どこかの河川からの流出であろう。大雨や台風シーズンには流木もしばしばみられることで、気にもならなかった。

しかし、汀線近く一帯に打上げられているものの中で、海草と違うものをみた。波にもまれて俵形になっているが、暑い日ざしに当たっても緑色がはっきり残っている。フサジュンサイであった。まだ波に漂っている俵形の塊を持ち帰り丁寧にほぐしてみた。

フサジュンサイ、オオカナダモ、エビモ、クロモ、その他不明種4種の淡水性の水草であった。不明種4種については、波に洗われて痛んではいたが、標本同定を本会角野康郎先生にお願いした。ササバモ、ヤナギモ、センニンモ、アイノコイトモの4種であった。オオカナダモと上記4種は、知多半島では筆者はまだ見たことがなく、記録もない。

昨年秋、蒲池海岸南隣の榎戸海岸で、ヌートリア（げっ歯類）が生け捕りされたこともある。このヌートリアは木曾川河口の海部郡津島地方に多くみられるため、海を渡ったのだろうか？ と、地元の新聞が報道していた。

蒲池海岸は、木曾三川の土砂の漂着地であるため、ヨシの大株と池沼生の水草8種は、同河川からの贈物か？どこから漂着したものか調べるのも興味深い。